猪熊氏と行く初冬の観天望気講習会

2019 年 11 月 16 日(土)、山岳気象予報士猪熊氏と行く初冬の観天望気講習会が開催されました。新宿から中央道を進むバスの中で、講師の猪熊さんがまとめられた観天望気用のＤＶＤを見ながら、基本的な説明を受けることによって、初めて参加される方も安心して備えることができました。途中、河口湖インター付近からは、見ごたえのある富士山が車窓に大きく広がり、真っ青な空には文字通り雲一つありません。

山中湖(標高 980m)に到着しましたが、初冬とはいえ平年よりも暖かい、まるでさわやかな秋のようなそよ風が吹いています。そして湖越しには富士山の頂上から麓までがすっきりと見渡せるという見事な快晴です。ところが、観天望気では雲の種類や成長のスピード、風の向きや速さなどを観測して気象の変化や、雨の可能性等を、肉眼や体感でとらえる必要があります。このような穏やかな天気は変化が乏しく、観測の対象が少なくなることから、あいにくのスタートとも言えます。

その一方で、微風快晴というのは絶好のハイキング日和でもあります。一日のうちには何らかの気象の変化があるものと期待して、参加者の皆さんをはじめ、講師やスタッフは足取りも軽く、最初の観望地点であるパノラマ台に向かいました。

出発時に講師から風向と風速(西北西の微風)と空気の湿り気(乾いた風)を、行程中の変化と対比するため記録しておくように指示があり、各自コンパスで計測などを行って、山中湖畔の交流プラザきららを出発しました。広葉樹と針葉樹の紅葉が入り混じる林を進むと、静寂の中に落ち葉を踏む音が響き、大木の隙間を見上げると、紅葉と澄んだ青空とのコントラストが見事です。

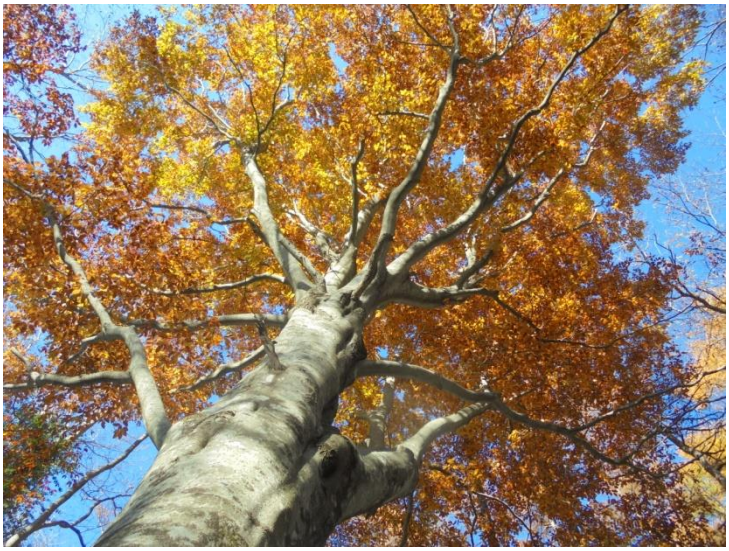
ススキ野原を抜けてほどなく山中湖を見下ろすパノラマ台(1090m)に到着しました。すでに風は南風に変わっています。太平洋に面している伊豆半島方面からの湿った空気が入り始めているためか、やや湿り気を感じます。そして目の前の富士山をはじめ白根三山など南アルプスの主峰、宝剣岳のカールを有する中央アルプス、北アルプスの穂高岳などの、3000ｍ級の名峰が遠望できます。南風を観測後、まさに絶景のパノラマ台をあとに、二つ目の観望地点である明神山（別名：鉄砲木ノ頭 1291m)に向かいました。

途中、陽が高くなるにつれて、南アルプスの周囲から次第に層雲が広がり、ところによっては層積雲が沸き上がってきました。今回観測された層雲は穏やかな空気の流れを現していて、あまり厚みがないこと、また 2000m付近に寒気が入ると対流が始まり、層積雲が形成され、天気が崩れる予兆にもなることなどから、空気が変化する状況を読み取り、気象の変化を予測すること、またこうした予兆をタイムリーに把握できるように空に注意を払うことが安全登山には不可欠であることなどを丁寧に教えていただきました。

三国峠を経て、次に訪れた三国山(1325m)では、樹林の間を抜けて太平洋の海面上から吹いてくる南風が、やや湿り気を帯びているように感じられました。そしてその頂上付近から、明神山の方角を振り返ると、積雲が発生していました。これは太平洋側からやって来る湿った風が、海面と標高差が約 1300mある三国山ハイキングコースの稜線にさえぎられて上昇し、その際に冷却された水蒸気が凝結して雲になったということを教えていただきました。このように、目の前で起こっている現象を通じて、しっかりと原因、過程、結果を体感し、納得しながら学ぶことができました。

山中湖へ戻る途中、富士山の南東側に独特の旗雲が現れました。冬季に富士山の上を吹く強風の風下で、山の斜面に沿って生じる上昇気流のために発生するのだそうです。

通常のハイキングでは、こうした気象の変化にも気づかずにいることがあるかもしれませんが、普段から細かな気象の変化を見落とさずに、注意深く観察することで、厳しい山行の際にも気象条件を正しく捉え、危険を回避することができるのではないかと考えました。そしてこうした地道な習慣こそが、グループ登山を率いてチームの安全を守るリーダーにも、一人で自分の安全を守る単独行者にとっても必要不可欠なことではなのだと、改めて教えていただきました。



猪熊講師には来年も引き続き冬山の気象の机上講座と観天望気の実技をご担当いただく予定でおります。皆様のご参加をお待ちしております。

気象委員　島田義信